

## 中学校 音楽 部会

部会長 川崎中学校 校長 村上きぬよ  
実践者 添田中学校 教諭 津田祐美子

### 研究主題

「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽科学習指導と評価」  
～鑑賞領域における知覚・感受力を高める支援を通して～

#### 1 主題設定の理由

##### (1) 社会の要請から

平成19年に一部改正された学校教育法では、義務教育の目標が具体的に示され、さらにその達成に向けて小中学校で育成する学力についても明示された。この学校教育法で示された学校教育で育成する学力は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の3つの要素からなる。そして、平成24年度から実施されている新学習指導要領では、この3つの要素を「確かな学力」として位置づけた。

これらは、以前起こった学力論争や OECD の PISA 調査の課題を受け、21世紀に生きる子供たちの教育の充実に向け、「生きる力」の主要な柱として、学力の3つの要素を調和的にはぐくむよう中央教育審議会において要請されたものである。

##### (2) これまでの音楽教育から

学校教育法の義務教育の目標に「生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸、その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。」とある。これは音楽科の目標である「表現および鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」の基となる目標だが、音楽科における教育の目的として「音楽を通して生活を明るく豊かにするため」と明示されている。言い換えれば、音楽の学習内容が、現在や将来において自分の生活に生かすためのものということができる。

しかし、これまでの授業を振り返ると、歌い方や演奏の仕方を教師が範唱奏し、生徒はそれを模倣するだけの活動に終始する傾向があった。また、鑑賞では教師の一方的な楽曲解説の後、楽曲を聴かせ、主観的な感想を書いて終わるという授業も多々あった。音楽の諸記号等についても、結果として知識として覚えさせることが目的となっていた。

これらのことから、音楽科における基礎的な知識や技能を確実に身につけさせ、生涯にわたって生活を明るく豊かにする「確かな学力」を身につけさせるために、思考力・判断力・表現力等をはぐくむことは大変意義深いといえる。

#### 2 主題の意味

##### (1) 思考力・判断力・表現力等をはぐくむとは

中央教育審議会答申で示された、基礎的・基本的な知識・技能の活用によって思考力・判断力・表現力等を育成する学習活動であり、具体的には次の内容である。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する。
- ② 事実を正確に理解し、伝達する。
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり解釈したりする。
- ④ 情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤ 課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する。
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

さらに答申では、思考力・判断力・表現力等の基盤となるのは言語の能力であり、学習活動での学習内容を言語化すること、つまり、学習したことを記録・要約・説明・論述するといった言語活動の充実が必要であるとしている。

(2) 思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽科学習指導と評価とは

音楽科において、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために活用される基礎的・基本的な知識・技能は、新学習指導要領で新たに示された「共通事項」が知識であり、「各学年の目標および内容」が技能である。

音楽科における思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習指導とは、〔共通事項〕イの音楽の要素とそれらの働きを表す用語や記号の理解を支えとしながら、〔共通事項〕アの音楽の要素や要素同士の関連の知覚と、それらの働きが生み出す特質や雰囲気の影響を通して、歌唱・器楽・創作の表現活動や鑑賞の内容を思考・判断し、それを技能や批評文等によって具現化することである。

さらに、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽科学習指導と評価とは、音楽表現の創意工夫を通して表現の技能を高めたり、鑑賞の能力を高めるための、知覚・感受力をはぐくむ手立てとその達成の状況を見取るための方法と規準である。

(3) 鑑賞領域における知覚・感受力を高める支援とは

知覚は、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽の要素や要素同士の関連を識別する能力である。これに対し感受は、音楽の要素や要素同士の関連によって生み出される雰囲気や特質を感性によって感じ取る能力である。

知覚力を高める支援とは、楽曲から音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を分析的に知覚させるための、視覚教材の導入やわかりやすい説明・助言の工夫等である。感受力を高める支援とは、感受した楽曲の雰囲気や特質を客観的に言葉にするための語彙の支援であり、言葉で説明したり批評する際のヒントとなる教材の工夫である。

### 3 研究の目標

鑑賞領域における、説明や批評をするための知覚・感受力を高める支援を通して、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ音楽科学習指導とその達成を見取る適切な評価方法について究明する。

### 4 研究仮説

鑑賞領域において、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じさせるために適切な支援を行えば、生徒は主体的に思考・判断し、感じ取ったことや思いを音楽的根拠に基づいて表現できるようになる。また、班や学級全体で交流することによって、自分の考え方をさらに深化させることができる。

### 5 研究計画（授業計画）

(1) 題材名 イメージと音楽 ～物語(詩)から生まれる表現の工夫～

主教材 歌曲「魔王」 ゲーテ詩 シューベルト作曲

(2) 目標

- ①表現の工夫から生み出される曲想と物語(詩)の関わりに関心を持ち、意欲的に聴く。
- ②声やピアノ伴奏の音高、リズム、旋律、速度、強弱、音色、調性の特徴や変化を知覚し、物語(詩)を表現するための工夫(作曲家・演奏者)を感じ取る。
- ③音楽的根拠に基づいた、より深まりのある鑑賞の仕方を学ぶ。

(3) 題材の指導計画

時	学習活動	教師の支援	評価規準		評価方法
			関心・意欲・態度	鑑賞の能力	
1	①楽曲を鑑賞し、物語の内容や情景登場人物、演奏形態を理解する。 ②登場人物の心情をつかむ。	○題名を伏せ、曲想や声の感じから自由にイメージさせる。 そう思う理由も大切にす。 ○始めはドイツ語で、2回目以降は日本語で鑑賞。着目点を事前に提示し、集中して聴かせる。	①課題に着目し、集中して聴いている。	①曲想を感受し、物語や情景をイメージできる。 ②声や楽器の音色に着目し、演奏形態、伴奏楽器を聴き取ることができる。	様相観察 発言・発表 の内容 学習プリント
2 本時	①4人の登場人物の特徴を感じ取る。 ②その特徴がどの音楽の要素（音高、強弱、音色、調性等）とその変化によるものかを知覚する。	○日本語で鑑賞。1回目は父子、2回目は魔王と語り手に絞って聴かせる。 ○個人→班→全体へと思考を広げていく。 ○音楽要素をカードで提示。 ○音楽の要素とその変化が、登場人物および各々の心情表現とどう関わっているか、整理して意識化させる。	①課題に着目し、集中して聴いている。 ②班や全体での意見交流に意欲的に参加し、他の考えも取り入れようとしている。	①音高・強弱・音色・調性等の違いを知覚し、各登場人物の特徴を捉え、言葉で表現できる。	様相観察 意見交流の様子や発言内容 学習プリント
3	①ピアノ伴奏の役割を理解し、より作品を味わう。 ②学習のまとめとして「魔王」の紹介文を作成する。	○前奏、会話の場面、最後を取り上げ、音楽要素を変えた伴奏パターンで聴き比べる。 ○なぜそう感じるのか、音楽の要素（音型、リズム、強弱、音色、調性）の特徴と効果を知覚させる。 ○これまでの学習プリントの記述を参考に、楽曲の特徴や魅力、作曲家・演奏者それぞれの表現の工夫について、音楽要素と関連づけて作成するよう指示する。	①課題に着目し、集中して聴いている。 ②班や全体での意見交流に意欲的に参加している。 ③作曲家・演奏者の工夫による表現のおもしろさに関心をもち、意欲的に紹介文を書いている。	①音型、リズム、強弱、音色、調性等の違いを知覚し、表現の効果を捉え言葉で表現できる。 ②知覚・感受した内容から、解釈したり価値を考えたりし、楽曲の特徴や魅力、表現の工夫を紹介文として自分なりに表現している。	様相観察 発言・発表の内容 学習プリント

6 指導の実際

(1) 本時の主眼

楽曲の雰囲気や曲想が、音楽の要素と特徴やその変化と深く関わっていることに気づかせるとともに、演奏者が音楽の特徴をどのように表現しているのかを感じ取り、情景を想像しながら積極的に鑑賞活動ができるようにする。

(2) 本時の指導観

「魔王」は説得力のある楽曲だ。各登場人物の台詞にあたる旋律の雰囲気や歌い方の違いを感じ取らせ、歌唱表現の豊かさを味わわせるとともに、情景や心情を表す伴奏にも注目させ、劇的な場面展開を豊かにイメージして鑑賞させるにふさわしい。生徒は一

学期にビバルディ「春」の鑑賞をし、音楽表現のおもしろさやイメージする楽しさを経験した。だがそれは楽曲を大まかにしか捉えていない漠然としたもので、自分が感じたことの根拠を説明するには至っていない生徒が多かった。本題材では、鑑賞の視点を明確にして、楽曲をより緻密に理解する力を育てたい。

本時は、生徒が無意識にとらえている音楽要素の特徴や変化を知覚・意識化させ、感受した曲想や雰囲気と関連させていく。前時の生徒の発言（イメージした理由、四人で歌っていると感じた生徒がいる）を導入に、作曲家・演奏者それぞれの工夫（音楽的な要素）があることを知らせ、各登場人物の音高、強弱、音色（声の感じ、歌い方）に着目させて、特徴とその変化を聴き取らせる。個人の考えをワークシートに記入した後、班で交流し、記入したシートを黒板に掲示して全体での思考の深まりをめざす。学習プリントの記入にあたっては、自分が感じたものは丸で囲み、交流で出た友達の意見も追加記入させる。これは自分の意見を大切にするとともに、思考の広がりを確認させるためである。生徒の意見をまとめる場面では、登場人物の特徴や表現の違いを音楽の各要素と関連づけて整理し、「音楽の要素とその関わりが楽曲の雰囲気や特徴を生み出す」ことを意識させたい。音楽の要素については、言葉としてまだ定着していないので、掲示カードにして印象づける。今後の鑑賞活動は勿論、合唱などの歌唱活動においても繰り返し使用することで、音楽の要素を知覚し、作者や演奏者の気持ちに合った声や表現の工夫につなげていきたい。

- (3) 準備：鑑賞用CD（日本語）、学習プリント、班会議シート（掲示用）、ペン  
 音楽の要素カード（音高・強弱・音色（声の感じ、歌い方）・調性・速度  
 リズム・テクスチャ（和音、音の重なり）・旋律） ※太字 今回特に使用

(4) 展開

学習内容・活動	指導上の留意点	形態	評価
1 学習のめあて、内容を確認する。	○前時の生徒の発言を取り上げながら、作曲家・演奏者が工夫をしていることを投げかける。	一斉	
登場人物のそれぞれの特徴を聴き取ろう。			
2 父、子の特徴を聴き取る。 個人の意見を学習プリントに記入。 ↓ 班で意見交流し、シートにまとめ、掲示。 ↓ 全体で交流。	○特に、音高とその変化、強弱や声の音色とその変化に着目させ、聴き取らせる。 ○父、子を対比させながら聴かせる。2つの聴き取りが難しい生徒は、どちらか一方でもよしとする。 ○一人一回は発言するよう、積極的な交流を促す。 ○自分が聴取し感受した内容は丸で囲んでおく。班や全体交流で参考になる意見は、書き加えさせる。 【父】低。落ち着き、なだめる → 不安、焦り 【子】高、徐々に高。強。おびえ → 絶叫、激しい	個 班 一斉	関① 鑑① 鑑②
3 魔王、語り手についても同様に特徴を聴き取る。	【魔王】やや高 → いきなり低。弱 → いきなり強。 軽い、甘く誘う、優しい → 脅す、本性出す。 【語り手】やや低。淡々、冷静 → 焦り、速くなる → 最後は冷酷に言い切る感じ	個 班 一斉	関① 鑑① 鑑②
4 音楽の特徴や表現と、音楽の要素との関わりについて気づく。	○それぞれの特徴や心情の表現がどの音楽の要素（音高、強弱、音色、調性）とその変化によるものか、出された意見を整理し、知覚させる。		

## 7 研究のまとめ

本題材において、思考力・判断力・表現力をはぐくむために、次のような知覚・感受力を高める支援を行った。

### (1) 要素を知覚するための支援

「魔王」はこれまでも多くの生徒が、その音楽表現の豊かさに魅せられ、おもしろさを感じてきた。作曲者と演奏者それぞれの表現の工夫により、生徒は音楽の要素の特徴や関わりとその変化をなんとなく感じ取っていたからだとおもう。今回、音楽の要素を意識して鑑賞させた結果、なぜそう感じるのかその根拠がはっきりした。父と子の特徴をまとめる場面で「音楽の要素カード」を掲示し、出された意見を整理したことで、生徒は何に注目すればよいのか鑑賞のポイントがつかめたようである。次の魔王と語り手の特徴を聴き取る活動ではさらに意欲的に、音楽要素を知覚しながら深く聴き取るうとする姿が見られた。

また、必要に応じてさまざまな音源を使い分けることの有効性を実感した。イメージを限定することなく自由な発想で音楽を聴かせたい場合は CD を、ある特定のイメージを印象付けたい場合には DVD を用いる。時には生演奏も取り入れると興味関心を高めることができる。3時間目のピアノ伴奏の聴き比べでは、馬の蹄の三連符を八分音符や付点をつけたリズムで、また緊張感のある E 音の連打を上下行にしたり、結末の重厚な 2 つの和音を長調に変えてスタッカートで弾いてみた。「遅一つ。散歩してるみたい。」

「チャンチャン！実はどっきりでした！みたい。」 一気に生徒の反応が高まり、音や指の動きに集中したことが感じられた。

### (2) 感受した内容を言葉にし、思考を広げる支援

感想を書くのが苦手だから鑑賞は嫌だと感じている生徒は少なくない。最初はイメージしたことを自由に発表させ、受け入れる。曲想や音楽要素を感受していると思われる生徒には、なぜそう感じたのか質問し、よく聴き取れていることはほめる。考えを出しやすい雰囲気づくりが第一段階。その後は個人の考えを班へ、全体へと学習形態を変えることで思考の広がりをめざした。自分の考えやイメージを交流する活動は、自分の意見が採り上げられる喜びや、自分と違う価値観に出会える驚きがある。しかし、そこには互いを受け入れる友好的な人間関係が必要だ。班の構成メンバーによっては、交流が活発に行えなかったところもあり、厳しさを感じた。班員に遠慮して自分の考えを出そうとしない生徒、どうせ班交流だからと他人任せになってしまった生徒も若干見られ残念だった。

## 8 成果と課題

### (1) 成果

○音楽を形作っている要素やその変化を知覚させる上で、楽曲のポイントを絞って繰り返し聴く活動は、生徒の能動的な鑑賞を促すために有効だった。

○感受した特徴や曲想と音楽の諸要素の働きについて考えさせる際に、「音楽の要素カード」を提示したことは効果的だった。

○どの要素が働いているのかを中心に学習プリントへ記述し、意見交換をする活動は、自分の考えを整理したり友達の意見を参考にしながら、より深く鑑賞する上で有効だった。

○学習のまとめとして紹介文を書く活動は、感受した楽曲の魅力や「自分が好きなど

ころ」が、知覚した音楽の要素の特徴を根拠に記述された内容が70%の生徒に見取ることができ、より深い鑑賞の仕方を学び始めた1年生にとっては有効だった。

## (2) 課題

- 自分の考えやイメージを交流する活動については、今後も音楽科の表現活動・鑑賞活動の中でも継続して取り入れていき、人間関係を構築しコミュニケーション力を育てていく必要がある。
- 鑑賞領域で意見交換や学習プリントに書いた内容（音楽の諸要素の働き）を表現活動にも生かせるような工夫を、今後は考えていきたい。

## ○参考文献

- ・文部科学省 「中学校学習指導要領解説 音楽編」 平成20年 教育芸術社
- ・文部科学省 「中央教育審議会平成20年答申」 平成20年 文部科学省HP
- ・大槻秀一編著「新編 これからの中学校音楽ここがポイント」 音楽之友社